

## 令和5年度全国学力・学習状況調査の結果について

本年4月18日、6年生児童、105名を対象に、国語・算数の学力調査（テスト）と、質問紙（アンケート）を通じた意識調査を実施しました。この調査における本校での結果について、その概要をお知らせします。

### 【学力の傾向】

本校児童の学力は、国語・算数ともに概ね県および国の平均値並みという結果になりました。正答数だけに注目すれば国語は県平均と同等（国平均をわずかに下回る）、算数では国、県平均の双方をわずかに上回る結果ですが、いずれも誤差の範囲と言えるものです。

問題傾向について見ていくと、国語では「書くこと」について、算数では「資料を読み解くこと」「資料に基づいて記述すること」について苦手としている傾向が見て取れます。双方に共通することとして、図表やグラフなどを読み解き、それを手がかりにしながら自分の言葉で表現する、ということについて、本校児童の弱みがあると言えそうです。そういった弱みを抱えながらも全体的には県・国の平均並みの結果を挙げていることから、逆に言えば、いわゆる型どおりの設問（単なる選択問題や計算問題）については、比較的高い正答率を示しているとも言えるでしょう。

国語	児童数	平均正答数	平均正答率 (%)	中央値	標準偏差
横浜市立新橋小学校	105	9.3 / 14	67	10.0	3.0
神奈川県（公立）	68,739	9.3 / 14	66	10.0	3.1
全国（公立）	964,350	9.4 / 14	67.2	10.0	2.9

算数	児童数	平均正答数	平均正答率 (%)	中央値	標準偏差
横浜市立新橋小学校	105	10.2 / 16	64	11.0	3.7
神奈川県（公立）	68,739	10.1 / 16	63	11.0	3.9
全国（公立）	964,350	10.0 / 16	62.5	11.0	3.8

### 【学習への関心・意欲】

一方、質問紙を通じて見られる傾向として、国語・算数ともに「(国語または算数の)学習が好きだ」「大切だ」「将来役に立つ」といった問いに対して、ポジティブな回答をした児童の比率が県・国のいずれをも有意に上回っていました。「楽しい授業」を届けたいという教職員の取り組みが形となっていることを感じます。ただ、気になる点としては、「(国語または算数の)内容はよく分かる」という問いに対して、いずれも「当てはまる」とした回答は県・国を上回っているものの、算数についてのみ「当てはまらない」という回答もまた県や国を上回る結果となっていることがあげられます。算数の学習について、「好き」「分かる」児童が多くいる一方で、あきらめを感じてしまっている児童もいるという二極化の傾向について、対応を考えていかななくてはならないと思います。これと関連して「先生は授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか」という問いについては、県及び国平均に比べ、若干ですが否定的な回答が多くなっています。「誰一人取り残さない」という理想に向け、子ども一人ひとりの目線に立って、授業その他の学習指導を改善していく努力を続けてまいります。

### 【生活・学習習慣】

第一にお伝えしたいことは、「学校に行くのは楽しいと思いますか」という問いへの児童の肯定的な回答が、県及び国に対して10ポイント以上上回っていることです。多くの子どもたちが日々楽しく登校してくれていることは、私たちにとってもこの上なくうれしいことです。しかしその一方、本校にもなかなか学校に足が向かない児童がいます。ただ、今日、学校では「学校に行かない・行けない」ことそれ自体が問題行動であるという考え方をしておりません。一人ひとりの児童にさまざまな背景がある中で、学校との関わり方や学び方にも、それぞれに適した形があり得るはずです。私たちはそうした一人ひとりの児童や保護者の皆さんと向き合いながら、その子なりの「形」を探り、実現することに努めていきたいと考えています。その際、お伝えしたような「大多数が楽しく過ごせている」学校のあり方が、なかなかそこに加わりにくい子にとって同調圧力のように感じられることがないように、お互いの違いを受容的に受け止める力を子どもたちに付けていくことを目指します。

続いて、生活や学習についての習慣についての問いです。ここでも、ご家庭の協力と子どもたちの頑張りがあいまって、いずれも県・国を上回る、望ましい習慣が身に付いている様子が分かりました。もちろん課題はありますが、生活態度や心身の健康において、県そして全国の状況よりも相対的によい状態にあると言えます。学習においては、本校で注力しているICT活用について、そのよさを実感する児童が多いこと。そして学校図書館の取り組みや、地域のご協力を含めた読み聞かせ活動の成果か、読書が好きだと答える児童が多いことも、本校の特色と言えます。

### 【規範意識・自己有用感】

規範意識、自己有用感は、どちらも県・国の平均的な水準にあります。しかしこれで良しとするにはまだ足りないとも考えています。とりわけ自己有用感については、日本の子どもたちは世界的に見て大変に低い状況にあることが指摘されており、その改善は急務です。本校においても数字を追うというのではなく、より本質的なところで、児童が自分自身を好きになり、また自分が社会を作り、変えていく主体なのだという意識を持てるように取り組んでいきたいと思えます。

### 【学校質問紙】

学校質問紙とは、教職員を対象に実施するアンケート調査です。いわば私たち教職員の自己評価と言えます。ここでは大きく分けて「教科指導」「授業改善・児童指導」「学校経営」の3つの領域について調査が行われました。順不同となりますが、授業改善・児童指導については、先に挙げた「学習への意欲・関心」および「生活・学習習慣」と表裏一体をなしており、児童の回答と同じようにポジティブな自己評価となっています。一方「教科指導」についても児童の回答と符合するように、算数の指導における課題が意識されています。具体的には実生活の中の事物と結びつけた指導や、タイルなどの具体物の操作を通じた概念の理解、公式なども暗記に終わらせずその仕組みを理解できるように工夫するといったことです。こうした点に丁寧に取り組んでいくことで、算数を「あきらめない」子を育てていくことができるという願いがここにあります。最後に学校経営についてですが、ここにはさらに「家庭や地域との連携等」「教職員の資質能力の向上」「学校運営」という3つの要素が含まれています。本校教職員は、家庭や地域との連携については、日頃より多大な協力をいただいていると認識しております。また自らの資質能力の向上については、日々そのことに努めているという意識を持っています。残る学校運営とは、学校で実施する教育課程などについて、より計画的に、改善を進めながら取り組んでいくといった項目です。私たちはこの点について課題意識を抱いており、今後に向けては、この調査結果を含めた学校の現状について深く考察しながら、場当たりの改善の取り組みを続けていきたいと考えています。